

2-7. 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致

(1)はじめに

市東部の額田地区は、三河高原の西端に位置している。額田東部には標高 400 メートルから 600 メートルの山々が連なっており、最東部には本市最高峰の本宮山が位置している。これらの山々は、豊川市との市境を形成し、西三河と東三河の境界となっている。額田地区はその 98 パーセントが山地であり、南部の男川と北部を流れる乙川が作る溪谷沿いの平地に大小の集落が点在する。

北部の乙川水系は花崗岩帯で、谷底が浅く広く発達した地形であるため耕地が比較的得やすい。南部の男川水系では領家変成岩類の広がる急峻な山と V 字谷が多くみられ、山の斜面が棚田として利用されてきた。鎌倉時代から室町時代の中頃までは足利氏とその一族の勢力が入り、戦国時代には日近城(桜形町)を拠点とした奥平氏が溪谷ごとに奥平庶家を配置し、一帯を支配した。江戸時代には約 50 か村に分かれ、幕府領、岡崎藩や鳥羽藩、西大平藩等の大名領、戸田家や巨勢家等の旗本領、天恩寺等の寺社領が入り組み、領主も入れ替わった。額田地区では、このような自然条件の違いに適応しながら、独自に営まれてきた人々の暮らしと民俗事例をみることができる。

表2-7-1 小風致の概要

小風致	建造物	活動
千万町の神楽にみる歴史的風致	八剱神社	千万町の神楽
須賀神社の祭礼山車と祭りばやしにみる歴史的風致	須賀神社	須賀神社の祭礼山車と祭りばやし
夏山八幡宮の火祭りにみる歴史的風致	夏山八幡宮	夏山八幡宮の火祭り
額田地区の当屋祭祀にみる歴史的風致	宮崎神社 石座神社	宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン) 石座神社「神迎え神事」(アマザケトウ)
大代町と雨山町のコト八日行事にみる歴史的風致	正泉寺 菩提院	大代町のコト八日行事 雨山町のコト八日行事
額田地区の猪垣にみる歴史的風致	万足平の猪垣	万足平の猪垣の石積み

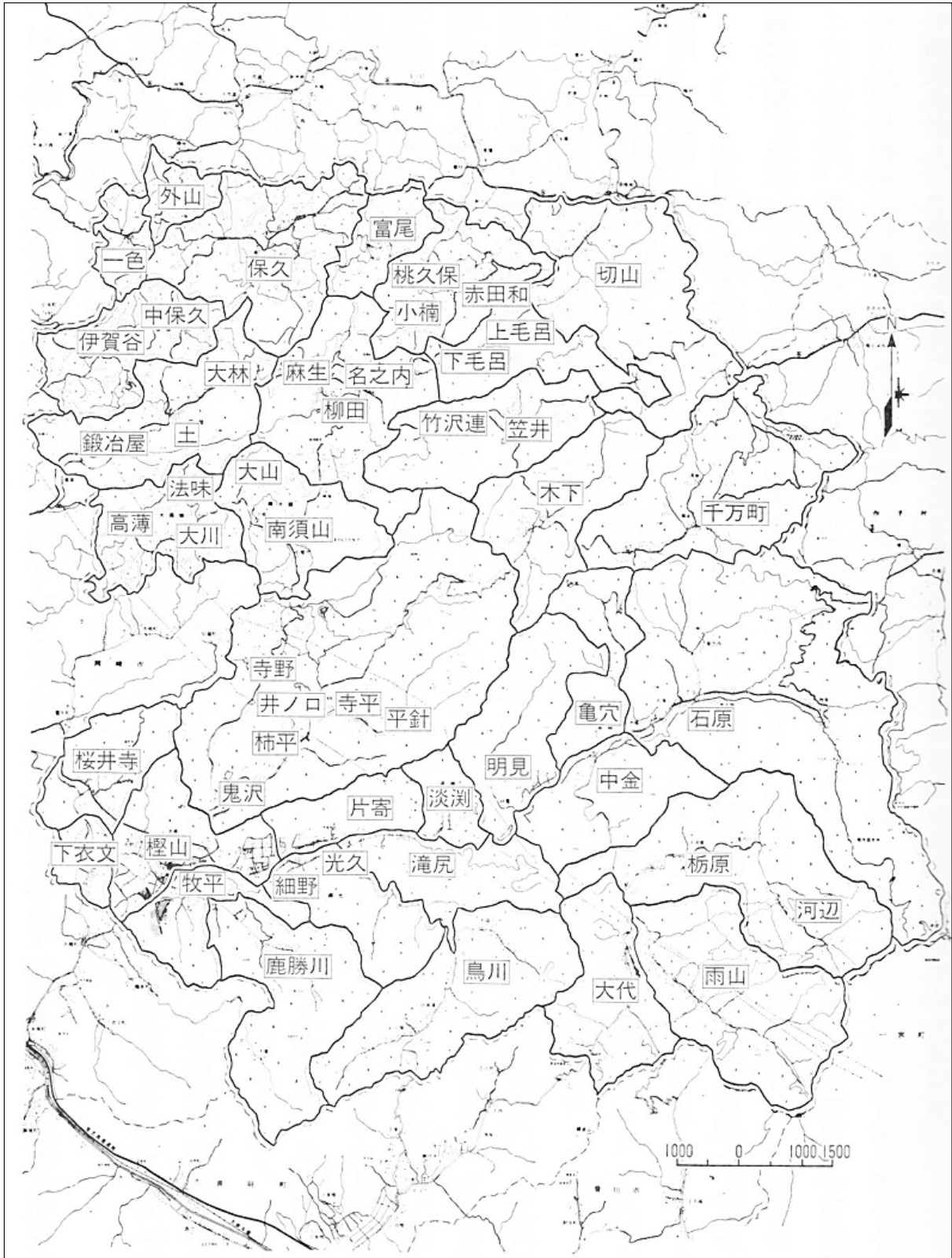


図2-7-1 近世の額田の村々（現在も村名の多くが町名や字名に残っている。）

(2) 千万町の神楽にみる歴史的風致

①はじめに

千万町ぜまんちようの神楽は、山あいにある八や劔つるぎ神社で4月第3日曜日に行われる春祭りにおいて、獅子舞神楽みこしとぎよと神輿渡御を行う祭礼であり、豊作と悪魔祓いの願いが込められている。

②建造物

ア.八劔神社

八劔神社ぜまんちようちよう（千万町町）は、日本武尊やまとたけるのみこと、建御方命たけみのかたのみことを祭神とし、文永3年(1266)創建と伝えられ、同年の棟札が残されている。三間社流造さんげんしやながれづくりの本殿は、絵様えようなどの様式から江戸時代後期の文化年間(1804～1817)頃のものとして推定されている。

③活動

ア.千万町の神楽

千万町かぐらの神楽は、八劔神社で4月第3日曜日の春祭りに豊作と悪魔祓いの願いを込めて奉納される神楽(県指定無形民俗文化財)である。

宝暦元年(1751)の文書には、この年の祭礼で神楽を舞ったという記録が残っている。ここで奉納される神楽は獅子舞神楽である。獅子の頭をつけ女物の着物を身につけた舞方が舞うため、嫁(娘)獅子神楽とも呼ばれ、その起源は歌舞伎を取り入れた獅子芝居であるとされる。その神楽の構成は、舞方あとじかた・後持方・笛方(2人)・太鼓方・囃子方〔太鼓・歌方(2人)〕で、獅子は御幣ごへいと鈴を持って「幕の舞」と「鈴の舞」を神社拝殿で奉納する。

祭礼当日、午前8時より関係者が神社にて幟のぼり、神輿ししがしら、獅子頭等の準備を行う。午前9時から八劔神社境内の矢場では祭礼弓の参加者が弓射きゅうしゃを始める。金的に的中するまで神輿渡御のオネリ(お練り)はできないとされ、弓射は祭礼の重要な役割を担っている。弓射と並行して、午前10時に開始される神事の後半で神楽が奉納される。午後2時頃には、送り囃子が奏されるなか、若宮社への神輿渡御となる。囃子の音



図2-7-2 八劔神社



図2-7-3 千万町の神楽 神楽奉納(ホラの舞)



図2-7-4 千万町の神楽 八劔神社での神楽奉納

を聞き、集落の人々が行列に加わる。若宮社に到着すると、神官らの参拝が行われ、その後、神楽が先程よりも賑やかに舞われ、見物人を楽しませる。午後4時頃、戻り囃子が奏されるなか、神輿は若宮社を後にして八劔神社へ還御する。

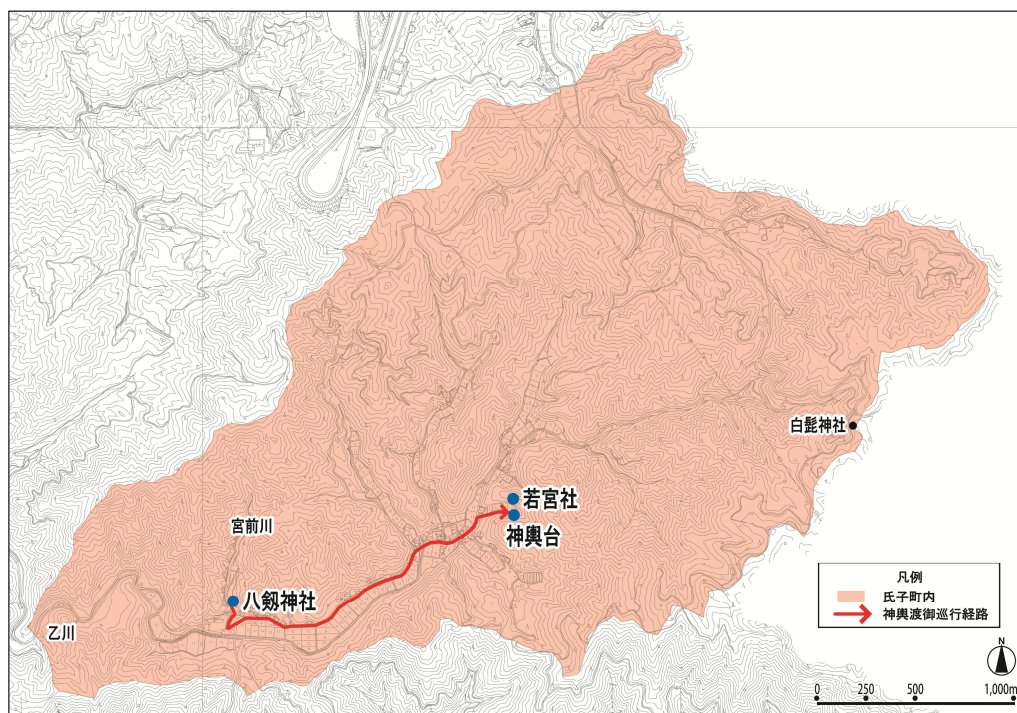


図2-7-5 千万町の神楽 御輿渡御巡行図

④まとめ

囃子が奏されるなか、集落の人々がお練り行列に加わる神輿渡御や、見物人を楽しませるように賑やかに舞う千万町の神楽からは、山深い厳しい自然環境の中で生きる人々の豊作と悪魔祓いの切なる願いが感じられる。

(3) 須賀神社の祭礼山車と祭りばやしにみる歴史的風致

①はじめに

須賀神社の祭礼山車と祭りばやしは、「^{かしやま}檜山の山車祭り」と呼ばれる春の祭礼で、4月第2日曜日に、額田地区の中心である檜山町のまちなかで山車と花車の巡行と神輿渡御、祭りばやしの奉納が行われる。

②建造物

ア. 須賀神社

須賀神社(檜山町)は、^{すきののおのみこと}須佐之男命等を祭神とし、本殿に永正10年(1513)の棟札があることから、室町時代後期には創立されていたことがわかる。^{にけんしゃながれづくり}二間社流造の本殿は、建築様式から18世紀中期の建物と考えられている。



図2-7-6 須賀神社

③活動

ア. 須賀神社の祭礼山車と祭りばやし

額田地区の中心となっている檜山町にある須賀神社では「檜山の山車祭り」と呼ばれる春の祭礼が行われている。

祭礼(市指定無形民俗文化財)は、江戸時代から続くとされ、明治8年(1875)の『祭礼記』に当時の様子が記されている。旧暦6月の祇園祭として催されていたが、明治末期より4月14日となり、近年は4月第2日曜日が祭礼日である。山車の綱を氏子総出で曳く様子から、「^{ありこ}蟻子祭り」とも呼ばれていた。

春のうららかな日の中を芽吹き始めた山々を背景に、山車と花車に続き、提灯、^{のぼり}幟等のお手道具と神輿の行列が檜山町内の^{おとこがわ(おとがわ)}男川河畔にある神明宮までまちなかを渡御する。神明宮では祭囃子を奉納し、夕刻に須賀神社へ帰着する。現在、山車は4台あり、明治28年(1895)頃製作の竜神丸(原組)、同じころ能見町より譲り



図2-7-7 須賀神社から神明宮へ祭礼山車の巡行



図2-7-8 神明宮での祭囃子奉納(御照覧)

受けた恵比寿丸(仲組)、鳳凰丸(庄野組)、平成10年(1998)新造の新若丸(新居野組)で、河瀬・宮北市組は花組と称し、花車(チャラボコ)で参加している。祭囃子はこれらの山車の上で演奏され、囃子の伝承には、それぞれの組が工夫・努力をしている。

また、神明宮で行われる年番の組による「御照覧」は囃子を神に奉納するだけでなく、囃子の型を守り伝える意味もある。

祭りの準備は、前日に御照覧舞台作り等の準備を行い、当日は朝から各組が山車の飾り付けを須賀神社境内で行う。御神体を神輿へ移す時は、拝殿の幕が降ろされ、神主と神輿を担ぐ者以外は拝殿より外に出る。以前は、3月下旬から須賀神社の傷んだハギコ(ハギの枝製玉垣)を替えるため、ハギコ集めをすることから始まった。ハギコ作りは年番の役目で、祭礼の2週間程前に傷んだ所を作り変えていたが、平成28年(2016)に白壁塀となった。

祭礼は午前11時30分、山車のお祓い後に年番組を先頭に宮出となる。4台の山車に続き、お手道具(御神灯、梵天、赤提灯、鉦等)、神輿と続く。午後1時頃、地区の中心にある四叉路の辻¹にて中休みをし、ここで花組が合流する。辻の特設舞台では余興が行われ、午後2時頃神明宮に向けて出発する。神明宮に到着後、式典及び「御照覧」が行われ、年番を務める2組がそれぞれ特設舞台において、囃子を披露し、午後3時30分に神明宮を出発する。午後4時30分頃、須賀神社前に到着し、祭りのクライマックスともいえる境内横の急な坂を順次、山車、花車を上げていく。

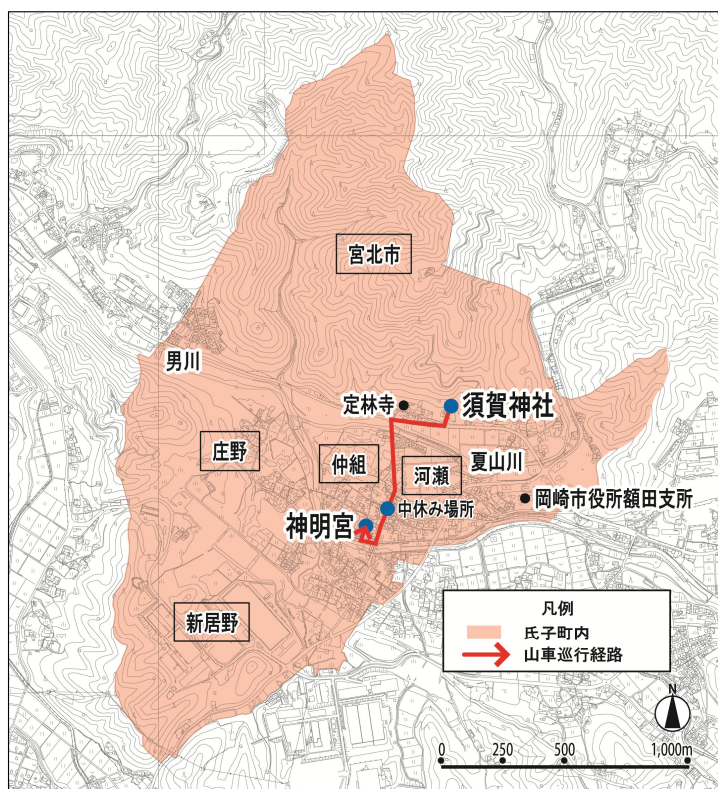


図2-7-9 須賀神社の祭礼山車巡行図

④まとめ

須賀神社の祭礼山車と祭りばやしは、春のうらかな日に新緑の山々を背景に山車と花車、神輿の行列がまちなかを渡御し、祭囃子を奉納する祭礼であり、額田地区の春の風物詩としての風情が感じられる。

¹ 地区の中心であり、余興・休憩の場所。

(4)夏山八幡宮の火祭りにみる歴史的風致

①はじめに

夏山八幡宮なつやまはちまんぐうの火祭りは、旧暦9月9日近くの日曜日に行われ、生木を積み上げた「ソダ山」に火をつけ、面を被った鬼がソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追い回す勇壮な火祭りである。

②建造物

ア.夏山八幡宮

夏山八幡宮(夏山町)は、平針てらだいら、寺平かきだいら、鬼沢おにさわ、寺野てらのの5集落そうじがみの総氏神で、由緒書によれば、額田部貞春ぬかた べのさだはるが三河国夏山郷柿平けいを開き、継体天皇25年(531)に祖神を祀ったのが始まりとされ、元慶4年(880)に応神天皇おうじんてんのう始め、6柱はしらを合祀して王宮八幡宮と称し、後に夏山八幡宮と改めたと伝わる。棟札によると、一間社流造いっけんしゃながれづくりの本殿は明治27年(1894)、拝殿は明治12年(1879)、神楽殿(舞殿)は昭和10年(1935)の建立である。舞殿は、幣殿へいでんと拝殿の間に建てられている。また、火祭りに使用したといわれる永禄元年(1558)の銘のある獅子頭が宝物として伝承されている。

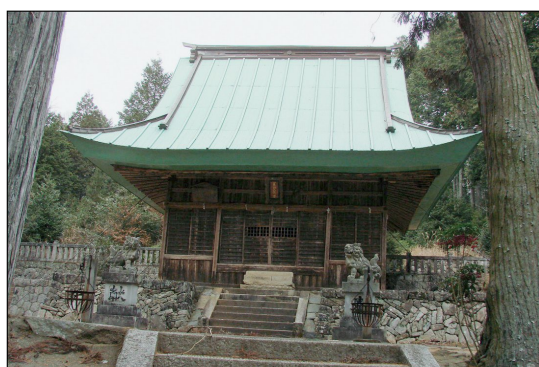


図2-7-10 夏山八幡宮

③活動

ア.夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮の火祭り(市指定無形民俗文化財)は、旧暦9月9日近くの日曜日に夏山八幡宮境内で行われる勇壮な火祭りである。町内の柿平・平針地区が1年ごとに当番となり、祭りを執行している。1年交代で、祭りを行うようになったのは、明治36年(1903)からである。

火祭りの準備は当日の午後0時30分頃から行われる。境内周辺の森から鉋でスギ・ヒノキ以外の生木を伐採し、拝殿前の広場に高さ3メートルほど積み上げて「ソダ山」を築く。そして厄男や若者から選ばれた「太夫たゆう」と呼ばれる鬼役が、白装束に身を包み水垢離みずごりし、潔斎けっさいを行う。水垢離みずごりの場所は、担当の集落で異なる。柿平は



図2-7-11 夏山の火祭り ソダ山の点火

八幡宮裏手にある集落の庚申^{こうしん}を祀る川の淵で、平針は集落の山中で不動明王を祀る滝である。その後、八幡宮に戻り、拝殿内で神火^{しんか}を熾^{おこ}し(火鑽り)、神降ろしを行う。この後、祭りはソダ山に火をつけて、面を被った鬼と鬼の師匠的な役割を果たす「ババ」が様々な所作事^{しよきごと}を行うことで進んでいく。鬼はババの所作事を真似るが、上手く真似られないとソダ山から燃え木を持ち、境内の参拝者を追いかけて回す。



図2-7-12 夏山の火祭り 火鑽り神事

参拝者は「ボケ、ボケ」等と鬼を囃し立てながら逃げ回り、両者が一体となって祭りを盛り上げる。鬼の持つ燃え木に打たれるとその年は病気にかからないとされる。



図2-7-13 夏山の火祭り 神降ろし



図2-7-14 夏山の火祭り 鬼追い

④まとめ

夏山の火祭りは、境内周辺の森から切り出した生木の山に火をつけ、燃え木を持つ鬼と参拝者の両者が一体となって祭りを盛り上げる。祭りからは急峻な山林の間の厳しい自然の中で生きる人々の厄除けと無病息災^{むびょうそくさい}の願いが感じられる。

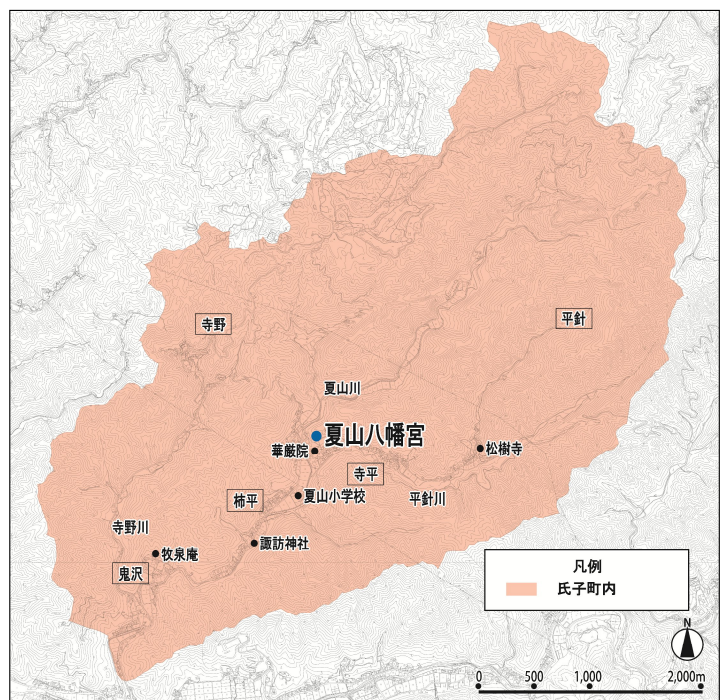


図2-7-15 夏山の火祭りの位置図

(5) 額田地区の当屋祭祀にみる歴史的風致

①はじめに

当(頭)屋とは、神社の祭りや講等に際し、神事や行事の世話をする人、またそのイエのことをいう。当(頭)屋が重要な役割を担って神社の祭祀が行われるため、当(頭)屋祭祀という。現在、当(頭)屋は1年交代で務めることが多く、その選出は紙クジあるいは家並順や帳簿等の記載に基づき、^{りんばん}輪番で行うことが多い。ここでは、宮崎神社の「オトウの神事」(オトウダイコン)と、^{いわくら}石座神社の「神迎え神事」(アマザケトウ)を取り上げる。

②建造物と活動

ア.宮崎神社「オトウの神事」(オトウダイコン)

a.宮崎神社

宮崎神社(明見町)は、^{すきの おのみこと}須佐之男命等を祭神とし、創立は^{すごう じんじや}菅生神社(菅生町)の由緒に天平宝治元年(757)に^{はりま}播磨国広峰社より^{ごずてんのう}牛頭天王を勧請されたと記され、このときに^{まんぞくだいら}万足平より現在地に天王宮として遷座され、明治当初に宮崎神社と改称された。寛永9年(1632)の棟札が残されており、このときに再建されたと伝えられるが、一間社流造の本殿は、^{こうりょう}虹梁の絵様等からみて、江戸時代中期の元禄～宝永年間(1688～1711)頃の建立と考えられている。



図2-7-16 宮崎神社

b.「オトウの神事」(オトウダイコン)

奥平氏が武田氏と戦った滝山合戦(天正元年(1573))の戦勝祝いに端を発すると伝わるオトウの神事(オトウダイコン)は、神社の氏子全体の行事としてではなく、明見町の行事として旧暦11月1日に行われる、神迎えの神事である。神事は当屋制をとる祭祀で、オトウとは神事に用いるオトウダイコン(大根の味噌煮)を準備する役割を担う当屋を指す。オトウとなる^{しゃもり}社守は、毎年神事後にクジで2名選出され、明治32年



図2-7-17 オトウダイコンの準備

(1899)から昭和35年(1960)までの記録が納められた箱を引き継ぎ、前年度の社守2名と共に任にあたる。関連資料として、明治32年(1899)の『宮崎神社乃ぼり役記帳』が残されている。

以前は、オオトウ、コトウとイエを区別し、オオトウのイエが輪番で当屋を務めていた。神迎いの2日前からオトウダイコンの仕込みが行われる。使用する大根は各戸から2～3本集められ、皮をむいた後、長さ5寸(約15センチメートル)の輪切りにする。一昼夜かけて水煮及び調味液で味が染み込むまで煮込む。調理する大根は200～250本に及ぶ。このとき、同時に神饌の一つで「オシロジロ」と呼ばれる洗米をすり鉢で粉状になるまで^オすり、水を加えてどろどろにした液状のものを準備する。当日、午前6時からの神事には各戸から男性1名が参列し、社守がオトウダイコンを献供して神迎えを行う。神事後、^{なおらい}直会にてオトウダイコンが振舞われる。



図2-7-18 オトウダイコン



図2-7-19 オシロジロの振舞い

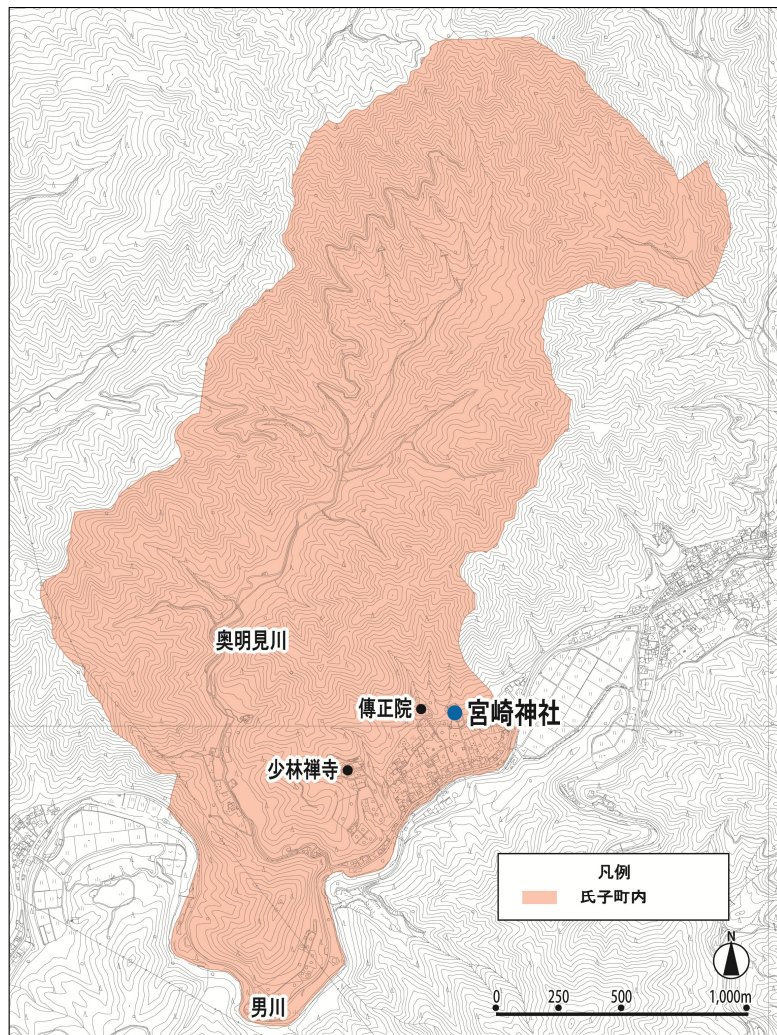


図2-7-20 オトウダイコンの位置図

イ.石座神社「神迎え神事」(アマザケトウ)

a.石座神社

石座神社(石原町)は、天照国照彦 天 火 明 命 等を祭神とし、創建は明らかでないが、大正13年(1924)の『三河國額田郡誌』によると、南設楽郡東郷の式内社石座神社から勧請されたとされている。一間社流造の本殿についても棟札等の建立時期を示す資料はないが、虹梁や木鼻の絵様から江戸時代中期頃の様式と考えられる。昭和5年(1930)には拝殿、幣殿、渡殿が改築されている。



図2-7-21 石座神社

b.「神迎え神事」(アマザケトウ)

オトウダイコンの神事の1週間後に行われるのが、石座神社の神迎え神事、アマザケトウである。

アマザケトウは、神社の六座社に「シロジロ」と呼ばれる 菜 と大根で作った舟に白神酒(甘酒)を入れた神饌を供える神事である。神事の際に甘酒を献じる当屋をアマザケトウと称し、毎年4名がクジで選出される。選出されたアマザケトウは神事前日にオコモリをし、祭礼の準備と神饌の調整を行う。当日早朝には境内脇の室合地川で禊を行った後、神事に臨む。



図2-7-22 大根舟・甘酒・シロジロ



図2-7-23 シロジロ



図2-7-24 大根舟

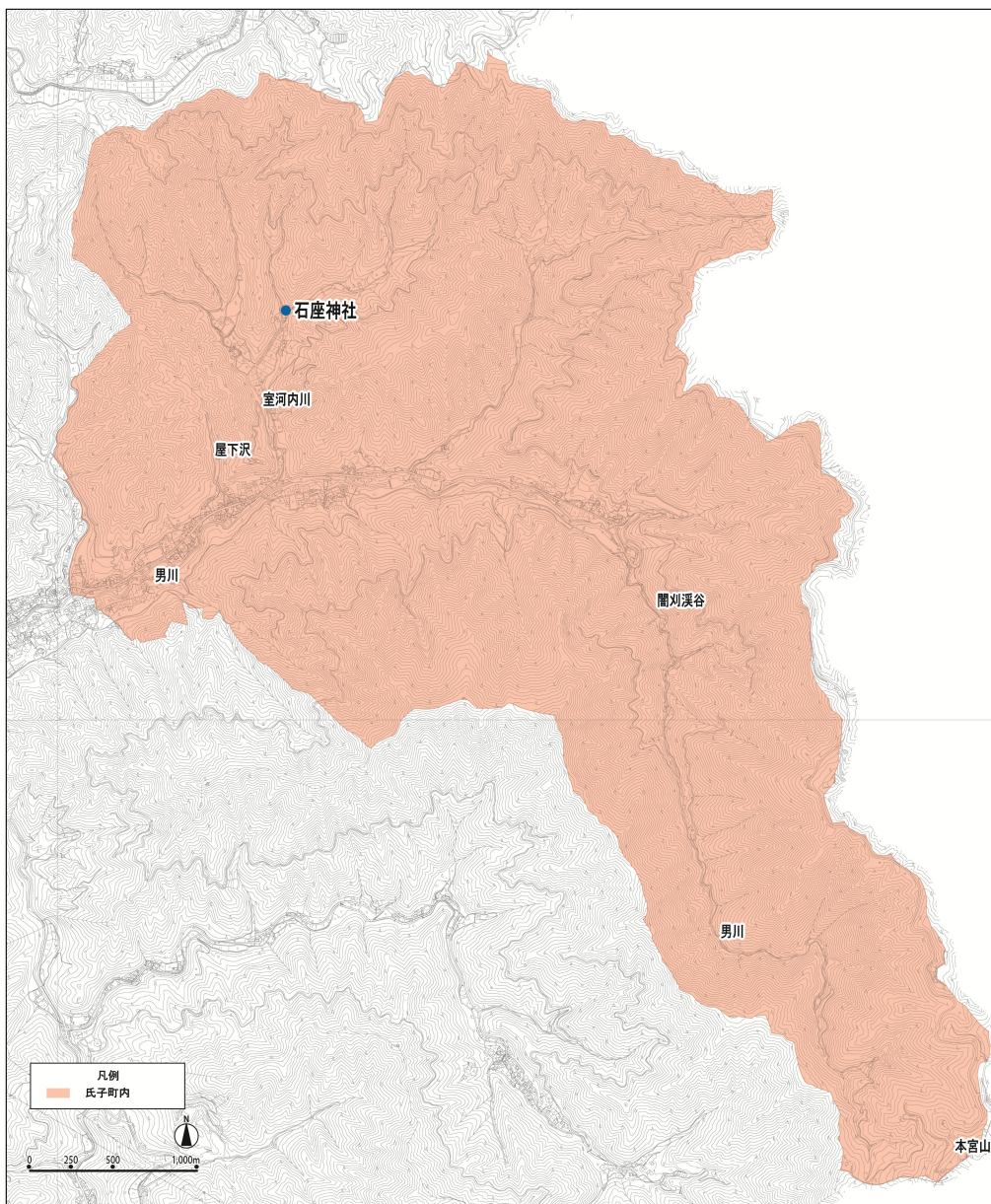


図2-7-25 アマザケトウの位置図

③まとめ

宮崎神社の「オトウの神事」や石座神社の「神迎え神事」といった、当屋制をとる祭祀は近畿地方を中心に広がっており、岡崎市域ではあまり見られないものである。額田地区独特の祭事であり、旧来とは少し変貌しつつも、現代のライフスタイルに合わせて当屋制の祭祀の形態を維持し、地域に息づく文化が伝承されている様子を見ることができる。

(6)大代町と雨山町のコト八日行事にみる歴史的風致

①はじめに

大代町^{おおじろ あめやま}と雨山町^{あめやま}では、コト八日行事^{よう か ぎょう じ}²として、2月8日のコトハジメに田畑や山の仕事を開始するにあたり、悪霊を藁人形^{ひょうい}に憑依^{ひょうい}させて、子供がムラ境まで送る「オカタ³送り」が行われている。

②建造物と活動

ア.大代町のコト八日行事

a.正泉寺

正泉寺^{しょうせんじ}(大代町)は曹洞宗^{そうとうしゅう}に属し、創建は永禄4年(1561)と伝えられている。本堂^{よせむねづくり}は寄棟造、トタン葺(旧茅葺)、周囲^{かわらひさし}に瓦庇を巡らしており、入口^{だいこうりょう}の大虹梁^{えよう}の絵様から明治・大正期の建立と考えられている。また、境内には安政2年(1855)の銘文がある釈迦如来等の石仏が祀られている。



図2-7-26 正泉寺

b.コト八日行事

昭和35年(1960)の『宮崎村誌』によると、大代町と雨山町では、2月8日に藁人形を作り、鉦太鼓^{かねたいこ}を打って送るコト八日行事が行われていた。大代町では、正泉寺に集合し、和尚による読経、お祓いが行われる。お祓いが終わると、子供たちは、鉦(1人)、太鼓(2人)、人形(3人)、御幣^{ごへい}(1人)の順番に並び、寺を出発する。鉦1回、太鼓1回「2月8日のコトハジメ」と唱えながら行く。大人は、子供たちを送り出すとすぐに百万遍^{ひやくまんべん}の数珠^{じゆず}を取り出し、各戸より参加した大人たちが車座になり、念仏が始まる。子供たちは、集落境に到着すると、人形と御幣を置き、軽く拝み、元来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。寺に着くと、百万遍も終了となる。昭和30年代まではそれぞれの家で八日餅をついて準備をした。また、コトオサメ行事(12月8日)も昭和50年(1975)頃まで行われていた。

² コト八日とは、2月と12月の8日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われる。2月8日をコトハジメ、12月8日をコトオサメと呼ぶ。(地域によっては逆になる。)

³ 憑依させる人形とコシのことを指す



図2-7-27 大代町のオカタ送り



図2-7-28 村境のオカタ場

イ. 雨山町のコト八日行事

a. 菩提院

菩提院(雨山町)は曹洞宗に属し、天文元年(1532)以前の創建で、棟札によれば元禄5年(1692)に本堂が建立されている。入母屋造、銅板葺(旧茅葺)、前面に広縁を通し、その奥に前後2列横3列の6室を構える方丈形式をとっている。禅宗寺院の本堂は方丈型が一般的であるが、ここではその前に露地と呼ばれる土間を通して、前面土間六室型の平面形式をとっている。江戸中期の貴重な建造物である。



図2-7-29 菩提院

b. コト八日行事

雨山町のコト八日行事は、菩提院に集合し、和尚による読経、お参りが行われる。その後、子供たちは、鉦(1人)、コシに乗せた人形(2人)、ハタ(2人)の順番に並び、「2月8日のコトハジメ」と唱え、鉦を2回鳴らしながら行く。片道3キロメートルのオカタ場に到着すると、人形とハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、振り返らず黙って帰る。



図2-7-30 雨山町のオカタ送り



図2-7-31 コシと人形

③まとめ

愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、大代町と雨山町など数カ所のみで、全国的にも分布の西端である可能性が高い、この地域独特の行事である。急峻な山林の間に営まれる山里を背景とし、人口減少などで行事の存続が困難な状況になりつつあるなか、地域に息づく文化を伝承しようとする人々の強い結びつきが感じられる。

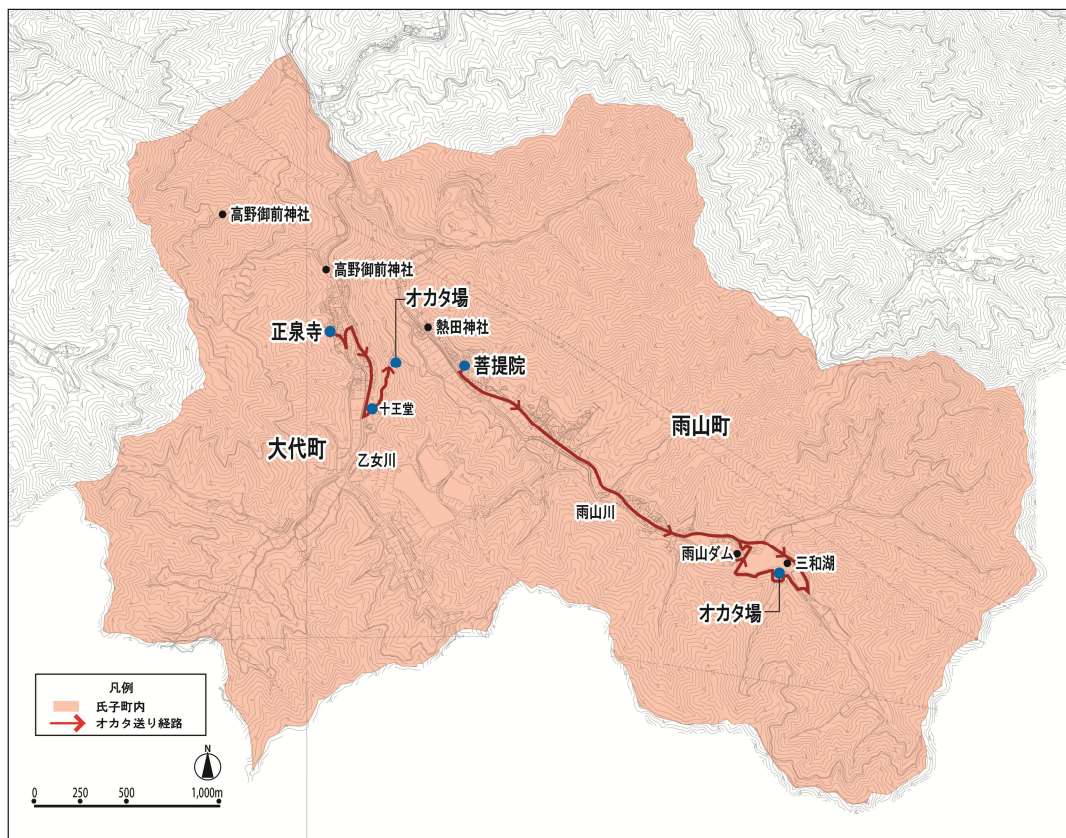


図2-7-32 オカタ送りの位置図

(7)額田地区の猪垣にみる歴史的風致

①はじめに

額田地区の猪垣は、山間地という限られた耕地を猪鹿等の獣害から守るために、額田地区南部の男川水系に分布する領家片麻岩を積み上げてつくられた。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、現在も地元の人々により保存・普及が図られている。

②建造物

ア.万足平の猪垣

猪垣の分布は、南部、特に宮崎地域が中心である。猪垣の主な材料である領家片麻岩は、節理により板状に割れるため、ほとんど加工せずに原石のまま石積みに利用できる利点があり、他の材料に比較して容易に築造できたものと考えられる。

猪垣は、高さ 1.6 メートル～2メートルで、石を垂直に積むものが大半であるが、イノシシに飛び越えられないと思わせるように山側に反らせて積んだものも見られる。この地域に特徴的で全国的にも希少な文化財である。建造時期は江戸時代中期から開始され近代まで続いており、築造方法もいくつかの形態・様式が確認されている。その総延長は 50 キロメートル以上とも推計されている。

額田地区の中金町有文書には寛政 4 年(1792)に「猪垣」の記載があり、石原町有文書には享和 3 年(1803)に「夥しく罷り出た」猪、鹿、猿を防ぐため「金子を借り入れ石垣を積み候」、天保 5 年(1834)「猪鹿之垣」とあり、近世から猪垣を築き耕地を獣害から守ってきたことが記録されている。

県指定有形民俗文化財の「万足平の猪垣」は、高さ約 2 メートル、底幅 1 メートル、上幅 0.6 メートルの造りで現存延長 612 メートルあり、文化 2 年(1805)と天保 3 年(1832)の 2 度にわたり築かれたという文献史料も残されている。



図2-7-33 万足平の猪垣(中金町)

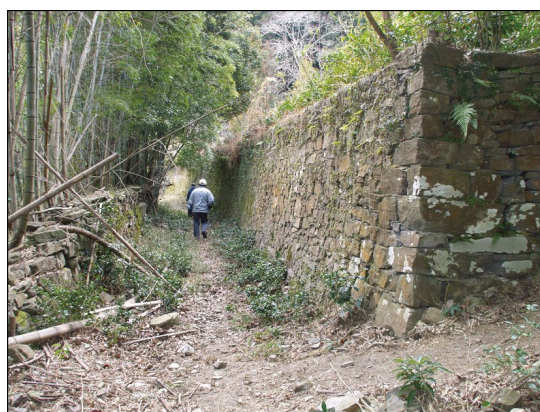


図2-7-34 孫左衛門の石垣(淡洲町)

③活動

ア.万足平の猪垣の石積み

額田地区では、山間地という限られた耕地を補うため、緩斜面に平坦面を形成した石垣棚田や、猪垣、家屋の土台となる石垣等、人々の生活により密着した事象として石積み文化が発展し、その技術が今に伝わっている。

額田地区の中金町有文書には、寛政4年(1792)に猪垣が大破し、「百姓自力ニ修 難復成 候間御見分奉願上候」とあり、近世から猪垣を築き、修復してきたことが記録されている。



図2-7-35 石積み講習会の実施(万足平を考える会)

平成17年(2005)には、「万足平を考える会」(中金町)が地元で立ち上がり、地域住民や学生・児童への石積み講習会を実施し、保存・普及を図っている。

④まとめ

山間地の急峻な山林の裾と、耕地の境に整然と巡らされた猪垣に囲まれた田畑で耕作が行われ、時折猪垣などを修理するこの地域独特の様子からは、耕作地を大切に守ってきた人々の意志が感じられる。

表2-7-2 猪垣・シシ穴(猪を生け捕りにする落とし穴)所在一覧

町名	No.	小字名	町名	No.	小字名	町名	No.	小字名	
滝尻	1	大小野	石原	27	梅ノ入	大代	53	長田	
	2	長沢	鹿勝川	28	嶋		54	カラ沢	
	3	長沢口	雨山	29	ヒガン田		55	サイカチ	
	4	山下		30	粟タワ(シシ穴)		56	大洞	
	5	上塚津		31	寺ヶ入(シシ穴を含む)	57	万足平		
	6	神田		32	東アワチ(石垣棚田を含む)	58	森西上		
	7	大野(石垣棚田、シシ穴)		33	ワセ田	59	小安道		
	片寄	8	馬場(シシ穴)	夏山	34	宮ノ入	東河原	60	ハマイバ
		9	札木		35	川原		61	治平向
10		細久後	36		入ノコ沢	62		滝沢口	
淡淵	11	山下	37		長崎	63		中川原	
	12	上塚津	38		ヒシノキ(石垣棚田)	64		堂皆津	
	13	大西	39		矢崎	65		貝津(シシ穴)	
	14	滝野	40		金蔵	66		曲久保	
明見	15	堂面	41		松川	67		草刈場(シシ穴)	
	16	日向(孫左衛門の石垣)	42		香木	68		黒石	
	17	黒谷	43		上向田(土塁形式のシシ垣)	69		ホドクチ	
宮崎	18	田代	44	惣礼(土塁形式に近いシシ垣)	70	仲田			
	19	妙慶	45	上柿平	71	セドノ田(片面式)			
石原	20	東原	細光	46	細野前(大海家・藤井家)	井沢	72	上日影(両面式)	
	21	宮脇		47	山畔		桜形	73	一本柿(両面式)
	22	室合内		48	大崎	鍛埜		74	日面(両面式)
	23	西横手		49	小源原		75	下切(石組)	
	24	相野向	大代	50	林下	毛呂	76	柿金日影	
	25	帝口(シシ穴)		51	大窪	大高味	77	大西(石垣)	
	26	東横手		52	大明神				

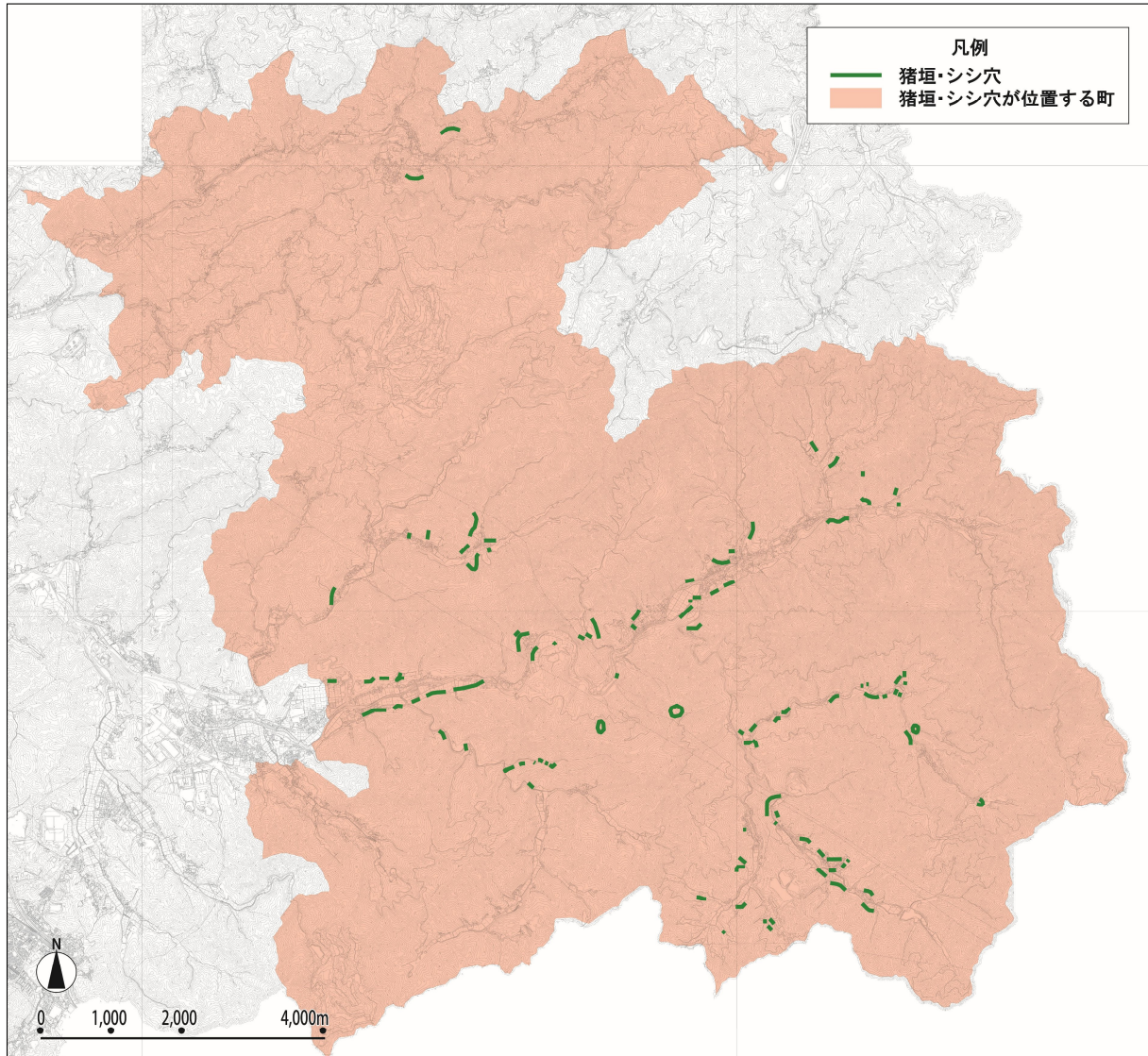


図2-7-36 猪垣・シシ穴の位置図

(8)おわりに

額田地区は岡崎市東部山地の急峻な山林の間に営まれる山里を背景としており、山間部に通じる街道により、岡崎市街、豊川市、信州とも関わりながら特有の文化を育んできた地域である。近世の額田地区には52か所ほどの村々があり、幕府領、大名領、旗本領、寺社領が入り組み、複雑な支配を受けていた。また、それ以前は豪族の支配拠点を中心に形成された村や戦乱を避けて住み着いた人々の村が混在していた。これら住民の歴史的、経済的な成り立ちから、様々な組織が生まれて強い結びつきが形成され、こうした結びつきから、毎年、男川本流の井堰から通じる用水路から田へ井道を普請し、また、炭焼きや茶の栽培等の生業も続けられている。

このように額田地区には地域の紐帯⁴の中心ともなる寺社や集落を舞台として、各地区の個性あふれる民俗行事と調和した景観が形成されており、山里のくらしとそこに息づく伝承文化が織りなす歴史的風致が感じられる。

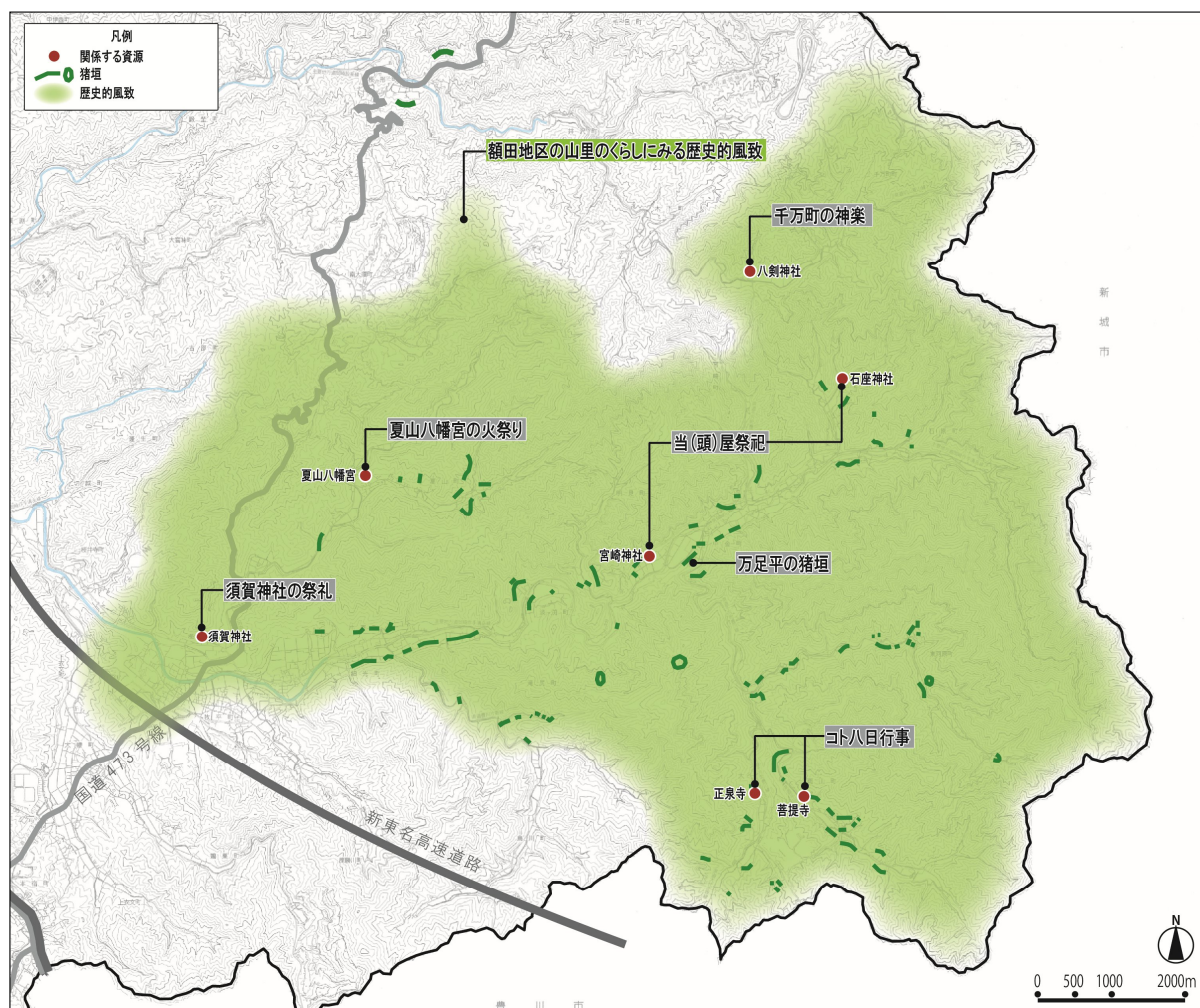


図2-7-37 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致の範囲

⁴ 社会を形づくる結びつき。